

令和元年5月20日現在

機関番号：10101  
 研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2016～2018  
 課題番号：16K16674  
 研究課題名（和文）エスニック・ツーリズムによる民族間関係の再編 中国雲南省回族社会の事例から  
  
 研究課題名（英文）Transformation of Interethnic Relationships through Ethnic Tourism: A Case Study of Hui Muslim Society in Yunnan Province, China  
  
 研究代表者  
 奈良 雅史（NARA, Masashi）  
  
 北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
  
 研究者番号：10737000  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、回族によるイスラーム復興運動の一環であった回族集住地域の景観のイスラーム化が政府による少数民族地域の経済発展や国民統合を目的とした観光開発と結びつき展開してきたプロセスを事例として、そこで創出される観光活動を媒介とした民族関係の再編のあり方を検討した。その結果として、民族観光はイスラーム復興運動を結びついていくなかで、ホストである回族にとっては非ムスリムへの宣教の機会の拡大、非ムスリムにとってはテロなどと結びつけられる回族集住地域への訪問として捉えられることで発展してきたことが明らかになった。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、観光活動を観光現場に限定し、ホストの文化をめぐるポリティクスとして理解する傾向が強かった既往研究に対し、観光活動を他の諸領域へと広がる実践と位置づけ、対立的な民族間関係を開かれたものへと変えていく契機となりうることを明らかにしたことで従来の枠組みを拡大しうる視座を提供した点にある。

社会的意義は、これまでエスニシティやジェンダーなど「差異のポリティクス」に焦点を当て、対立的図式で理解されがちであった民族・宗教問題のあり方そのものの再検討を促す点、観光開発が社会的安定や平和にも貢献しうるものであることを示し、単なる経済振興だけではない観光開発のあり方の可能性を提示した点にある。

研究成果の概要（英文）：This research project examined transformation of inter-ethnic relationships via tourism activities, focusing on process whereby the Islamization of the landscape in the Hui Muslim Minority areas as part of the Islamic movements and the Chinese government-led tourism development aiming for economic development in ethnic minorities areas and the unification of the people have intertwined. As a result, it revealed that Hui Muslim minority as a host has not only regarded ethnic tourism as expansion of opportunity of missionary activities for non-Muslim tourists, but non-Muslim tourists has also regarded Hui Muslim minority areas as the dens of terrorists so that ethnic tourism has developed.

研究分野：文化人類学、観光研究

キーワード：エスニシティ 民族観光 イスラーム 中国ムスリム 回族 文化人類学 イスラーム復興 民族間関係

## 1. 研究開始当初の背景

1979年に「改革・開放」以降、中国政府は少数民族の生活や文化を資源とする民族観光を振興し、少数民族地域の貧困問題の解決および地域振興を図ろうとしてきた。そうした状況を踏まえ、中国の少数民族研究では、政府主導の観光開発の過程における国家と少数民族、あるいは主なゲストである漢族とホストである少数民族とのあいだでのせめぎあいのなかで、少数民族の伝統文化がいかなる変容を遂げてきたのかが中心的な問題として論じられてきた [e.g. 瀬川昌久編 2003『文化のディスプレイ』]。言い換えれば、エスニック・ツーリズムの現場は、少数民族文化をめぐるポリティクスのもと捉えられてきたのである。

こうした研究は、観光人類学がそうであったように [e.g. 太田好信 1993「文化の客体化」『民族学研究』57(4)]、実体としての文化を自明視してきた従来の文化理解に対する批判を促し、文化が文化の担い手であるホストだけではなく、「部外者」であるゲストをも含む関係のなかで創造されるとする視座を提示した。その点で、観光研究が従来の中国少数民族研究に対して果たした役割は極めて大きい。

しかし、既往研究は、文化的な動態を理解しようとするあまり、それがより顕著に見られる観光現場に分析対象を限定する傾向にあった [e.g. 橋本和也 1999『観光人類学の戦略』]。本来的に観光は領域横断的な実践であり、それをホスト - ゲスト関係などといった観光現象に還元して理解することは観光をめぐる人々の諸実践を矮小化することになりかねない。そのため、観光活動を人々の生活のなかに位置づけて理解する必要性が指摘されてきた [e.g. Dinu, Mihaela Sofia (ed.). 2013. *New Trends in the Anthropology of Tourism*, *Journal of Tourism Challenges and Trends* 6(2)]。

こうした研究動向を受け、近年は観光を他の諸領域へと拡がるより広い文脈に位置づけて捉えようとする試みが行われてきた [e.g. 久保忠行 2014「タイのカヤン観光の成立と変遷」『東南アジア研究』51(2)]。申請者もこれまでの研究においても観光活動が、極めて複合的なかたちで行われていることを明らかにしてきた。例えば、中国雲南省のムスリム・マイノリティ回族のあいだで 2000 年代以降、盛んに行われてきた宣教活動は、観光活動を媒介として、異性との出会いの場、貧困地域の振興など一見イスラームとは関係しない要素と不可分なものとして展開されてきた [奈良雅史 2013「漢化とイスラーム復興のあいだ：中国雲南省における回族大学生の宣教活動の事例から」『宗教と社会』19]。

しかし、特に回族集住地域における政府主導の観光開発が盛んになった 2000 年代以降、観光は単に回族文化の再編の媒介になるだけではなく、民族間関係の再編をも促し始めている。「改革・開放」以降、宗教政策の緩和により、回族社会ではイスラームが急激に復興した。その過程で回族集住地区では回族自身により、モスクやその周辺の家屋の改修などによる景観のイスラーム化が進められ、それが回族観光客を引きつけてきた。さらに 2000 年代以降、少数民族地域の経済発展を目指す政府の支援を受け、モスク再建や街並みの整備はより一層大規模に進められた。結果、近年そうしたムスリム集住地区はムスリムだけではなく、「少数民族文化」を求める漢族など他民族・非ムスリム観光客をも引きつけるようになってきた。

しかし、雲南省では清朝末期、さらに文革期に回族に対する虐殺が起きており、回族と漢族などの他民族の間の民族対立は今も根強い。そのため、ごく最近まで回族は他民族がモスクに入ることを拒み、また漢族たちも回族集住地区に近づかないという状況が一般的であった。

こうした歴史的背景を踏まえ、回族集住地区における観光開発に伴う変化は、単にホストである回族の文化のみに焦点を当て、その変容・創造として理解されるべきではなく、むしろ観光を通じた回族と漢族などの他民族・非ムスリムとの民族間関係の変化と捉えられるべきであると考えに至った。言い換えれば、それは先行研究において「ホストの文化をめぐるポリティクス」として捉えられてきた観光現象を、観光開発を媒介とした、ホストとゲスト双方を含む多民族・多宗教間の関係の再編を促す交渉の場として捉え直すことであり、宗教・民族と観光化・地域振興を巡る新たな知見が得られるものと考えた。

## 2. 研究の目的

以上の学術的背景を踏まえ、本研究は、これまで申請者が研究してきた回族によるイスラーム復興運動の一環として進められてきた景観のイスラーム化が、政府の観光開発と結びつきながら展開された結果、回族と他民族・非ムスリムとの関係が開かれたものに再編されつつあるプロセスを描き出すことで、観光活動を媒介とした多宗教・多民族間の関係のあり方を論じ、観光とエスニシティに関する新たな理論的モデルを提示することを目的とした。

以上の目的を達成するために、まず、イスラーム復興運動に参加する回族の視点から、その実態の変化、特にその運動が観光開発と結びついてきたプロセスを明らかにする。また同時に、政府の観光政策の実施状況の調査から、政府の視点からもそのプロセスを描き出す(課題)。第二に、回族集住地区におけるエスニック・ツーリズムの実態をホストである回族、ゲストである回族および他民族・非ムスリムそれぞれの視点から、特にそれぞれの観光活動への関与目的に焦点を当て、明らかにする(課題)。第三に、上記 2 つの事例研究に並行して、エスニック・ツーリズムおよびエスニシティに関する理論的研究を行う(課題)。

### 3. 研究の方法

本研究は、上述した3つの課題に取り組むために3年間をかけて、それぞれの課題に対応した形で2つの事例研究と1つの理論研究を実施した。

#### 課題 イスラーム復興運動と観光開発の関係

雲南省昆明市および紅河州沙甸区におけるイスラーム復興運動の参加者への聞き取り調査、および彼らの活動における参与観察を実施し、観光関連の活動がイスラーム復興運動に組み込まれた経緯やその際のコンフリクトなどを調査した。また、具体的な観光政策に関わる法令について、雲南省図書館などで文献調査を実施し、政府が回族集住地区における観光開発を推進する意図、およびそれがイスラーム復興と結びついている状況に対する認識について検討した。これらを通じて、イスラーム復興運動が観光開発と結びついてきたプロセスを回族、政府双方の視点から明らかにすることを試みた。

#### 課題 観光現場での民族間関係の変容

雲南省においてイスラーム復興が顕著で、かつ観光開発も活発な回族集住地区である紅河州沙甸区におけるモスクでの参与観察と聞き取り調査を実施し、地元の回族がゲスト（回族とそれ以外の民族それぞれ）をどのように位置づけ、どのように受け入れているのかを明らかにした。また、同地域を訪れるゲスト（回族とそれ以外の民族それぞれ）が何を期待して回族集住地区に観光に訪れるのか、またそこで実際に何を体験するのかを（1）と同様に調査した。

#### 課題 エスニック・ツーリズムとエスニシティに関する理論的研究

課題、の成果を踏まえ、宗教と公共性に関する先行研究[e.g. Butler, Judith. 2011. *The Power of Religion in the Public Sphere*. New York: Columbia University Press]、ムスリムとコスモポリタニズムとの関係に関する先行研究[e.g. MacLean, Derryll N. & Ahmed, Sikeena Karmali. (eds.) 2012. *Cosmopolitanisms in Muslim Context: Perspectives from the Past*. Edinburgh: Edinburgh University Press]や人類学における共生をエスニック・ツーリズムおよびエスニシティに関する先行研究[e.g. 風間計博編 2017『交錯と共生の人類学：オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』ナカニシヤ出版]を検討した。

### 4. 研究成果

#### 観光開発とイスラーム復興の関係

宣教活動やイスラーム教育などの活発化を特徴とするムスリム・マイノリティである回族によるイスラーム復興運動は、宗教活動への管理統制を強める中国共産党政府によって取り締まられる傾向にある。その一方で、中国共産党政府は、少数民族地域の経済発展や国民統合を推し進めるために、少数民族地域における民族観光の開発を進めてきた。そこには回族集住地域も含まれる。回族文化はイスラーム信仰をその特徴としており、回族集住地域における観光開発はイスラーム的な景観の整備も含まれる。現地の回族たちは政府主導の民族観光開発という枠組みにおいてイスラームに関係する活動を活発化させてきた。言い換えれば、政府の観光開発は意図せざる結果として、回族たちに政府によって厳しく制限されてきた宗教活動を活発化しうる余地を開いているのである。

#### 民族観光におけるホスト/ゲスト関係

上記の民族観光開発に伴い、それまで非ムスリム・非回族が訪れることを忌避する傾向にあった回族集住地域にやってくるようになった。一方で、従来非ムスリム・非回族が現地の回族たちも非ムスリム・非回族の観光客を積極的に受け入れるようになってきた。一見すると、政府主導の民族観光開発が成功し、国民統合が進んでいるようにも見える。

しかし、現地の回族たちはイスラーム復興の文脈で、観光客の増加を捉えていた。回族社会においては回族という民族的カテゴリーとムスリムという宗教的カテゴリーが不可分なものとされてきた。しかし、改革・開放以降のイスラーム復興に伴う、より厳格なイスラーム言説の影響により、より厳格かつ意識的にイスラームを実践することがムスリムであることと条件であるとみなすようになってきた。結果として民族的カテゴリーと宗教的カテゴリーは異なるカテゴリーとみなされるようになり、回族以外の民族を潜在的なムスリムとみなすことを可能にしてきた。よって観光客の増加は、現地の回族にとって宣教の機会として捉えられ、積極的に観光客の受け入れが進められてきたのである。

その一方で、他民族・非ムスリムの観光客は、2014年に雲南省昆明市で起こったウイグル人が首謀者であるとされるテロ事件を契機に増加した。雲南省の回族集住地域が彼らの潜伏として報道され、そのイスラーム的な景観が広く知られたことによる。そのため、これらの観光客は「テロリストの巣窟はどこなところなのか」といった好奇心で回族集住地域にやってくるという。つまり、国家にあだなすムスリムたちというステレオタイプの回族理解が民族観光の発

展を促しているのであり、政府が目指す観光開発による国民統合が必ずしも実現しているわけではない。

民族観光はこのように異なる意図を持ったホスト、ゲストが会おう場を生み出してきた。ここでは必ずしも中国政府が目指す国民統合が推進されるわけではない。しかし、民族観光は少なくともそれまで会おう機会のなかった回族と他民族・非ムスリムとのあいだのコンタクト・ゾーンを生み出している。

#### 民族間関係の変化

先行研究において民族観光の発展はナショナル・アイデンティティの構築を促進し、民族間対立の緩和を促進する、あるいは観光資源をめぐる競合により民族間対立を悪化させると、その影響は肯定的にも否定的にも議論されてきた。しかし、これらの議論は民族間関係の変化の要因を観光のみに還元する傾向にある。しかし、上述のように、ホストである回族にとって観光はイスラームの宣教の機会と捉えられる一方で、ゲストの非ムスリム・他民族の観光客は回族を国家を脅かす存在として他者化している。こうしたイスラーム復興に伴うアクターたちの異なる意図が契機となって、民族観光の発展を促している。つまり、民族観光の発展は、改革・開放以降のイスラーム復興という文脈なしには理解できないものとなっている。

よって、政府主導の民族観光開発を通じた国民意識の醸成により民族的アイデンティティが後景化することで民族間関係が変化しているわけではない。むしろ、観光開発がイスラーム復興と結びついていくことで、対立関係にある民族・宗教間の関係を媒介し、その関係を開かれたものへと変化させつつあるのである。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計6件)

NARA, Masashi. 2018. A Change in the Ethnicity/Religiosity of the Hui People and Tourism Development: A Case Study of Hui Muslim Society in Yunnan Province, China. *Proceedings: International Symposium "Ethnicities in China and their Interaction with Global Society in the era of BELT and ROAD INITIATIVE"*, pp.22-34, Non-Peer Reviewed.

NARA, Masashi. 2018. Autonomy in Movement: Informal Islamic Pedagogical Activities among Hui Muslims in China. *Déjà Lu* 6 1-51, Peer Reviewed.

奈良雅史 2018 「民族旅游与族群性的变化：雲南省紅河州回族社会的“接触地帯”」 『International Workshop “現代中国の人口流動与族群関係”』、65-72頁、査読なし。

奈良雅史 2017 「旅するムスリム：現代中国における回族のイスラーム実践」 『CATS 叢書(観光地域マネジメント寄附講座 10周年記念「観光創造学へのチャレンジ」』 11: 111-116、査読なし。

奈良雅史 2016 「現代中国における宗教的状况をめぐる人類学的研究：二重の宗教的正統性と宗教実践のもつれ」 『社会人類学年報』 42: 143-155、2016年、査読あり。

奈良雅史 2016 「現代中国における宗教的マイノリティの自律性 雲南省昆明市の回族によるインフォーマルな宗教活動を事例として」 『富士ゼロックス 小林節太郎記念基金 2013年度研究助成論文』、1-38頁、2016年、査読なし。

### 〔学会発表〕(計9件)

奈良雅史 「敬虔さの経済：回族社会の変化とイスラーム復興」 東アジア人類学研究会第五回研究大会：分科会「「不真面目」なイスラーム実践から考える宗教的規範の再創造」 2018年11月11日、東北大学。

Nara, Masashi. A Change in the Ethnicity/Religiosity of the Hui People and Tourism Development: A Case Study of Hui Muslim Society in Yunnan Province, China. *International Symposium "Ethnicities in China and their Interaction with Global Society in the era of BELT and ROAD INITIATIVE"*, 4<sup>th</sup> November 2018, Waseda University.

奈良雅史 「エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化：中国雲南省における回族社会の事例から」 國學院大學共存学公開研究会、2018年10月13日、國學院大學。

奈良雅史 「トランスナショナルなムスリムの共在：中国浙江省義烏市の事例から」 東南アジア学会・北海道・東北地区特別例会シンポジウム、2018年10月6日、北海道大学。

奈良雅史 「「公益」の生成 中国雲南省昆明市回族社会における公益活動の事例から」 日本文化人類学会第52回研究大会・分科会「宗教と開発の人類学 グローバル化するポスト世俗主義と開発言説」 2018年6月3日、弘前大学。

奈良雅史 「民族旅游与族群性的变化：云南红河州回族社会的“接触地帯”」 『International Workshop “現代中国の人口流動与族群关系”』、2018年3月24日、四川大学。

Nara, Masashi. Relationships between Religiosity and Ethnicity of Hui Muslims: A Change in Textbooks of Islamic Education in Yunnan Province, China. *East Asian Anthropological Association Conference 2017*. 15<sup>th</sup> October 2017, Chinese University

of Hong Kong.

Nara, Masashi. Keep on Moving: Informal Islamic Pedagogical activities amongst Hui Muslims in Contemporary China. Ethnographies of Islam in China. 28<sup>th</sup> March 2017, SOAS China Institute.

Nara, Masashi. A Change in Inter-ethnic Relationships amongst Hui Muslims: Entanglements of Islamic Revival and Ethnic Tourism in Contemporary China. The 19th Hokkaido University and Seoul National University Joint Symposium: Re-imagining East Asia in Tourism. 25<sup>th</sup> November 2016, Hokkaido University.

〔図書〕(計5件)

奈良雅史(翻訳)2019「国家・社会の関係から文化の政治学を考察する：中国における人類学的研究の概観」(金光億) 韓敏編『家族・民族・国家：東アジアの人類学的アプローチ』、259-284頁、風響社。

奈良雅史(分担執筆)2019「イスラーム教育におけるテキストの変容：回族の民族・宗教性の変化との関係から」山田敦士編『中国雲南の書承文化：記録・保存・継承』、119-133頁、勉誠出版。

奈良雅史(翻訳)2018「ノースカロライナ州沿岸地域の三つの町における観光と開発」(ジョン・グレゴリー・ペック/アリス・シアー・ラピ) ヴァレン・L・スミス編、市野澤潤平・東賢太郎・橋本和也(監訳)『ホスト・アンド・ゲスト：観光人類学とはなにか』、255-283頁、ミネルヴァ書房。

奈良雅史(分担執筆)2017「“公益”的生成：以昆明市回族社会的公益活动为例」范可・杨德睿編『“俗”与“圣”的文化实践』、283-298頁、中国社会科学出版社。

奈良雅史(分担執筆)2017「“宗教”をはみ出す：雲南のムスリムのなかでのフィールドワーク」西澤治彦・河合洋尚編『フィールドワーク 中国という現場、人類学という実践』、117-136頁、風響社。

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

ホームページ等

Researchmap: <https://researchmap.jp/naramasaki/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

なし

### (2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。